

# 水のほとりの女

一幕

田中澄江

人物

きよ

みち

森 (声ばかり)

子供 (声ばかり)

遠くに女学生の合唱が聞える。滝れん太郎の「すみだ川」歌の終りに近く幕が上がる。左に水いろの襖と右に灰いろの壁があり、正面は白い障子の窓である。

女が二人動かないでいる。

きよはうすい緑の服をのせたミシンの上に両肘ついて掌で顔を被っている。袖の長いぎんねずいろの服を着ている。二つにわけた三つ編みを上にあげた髪。背のわりにうすい肉づき。からみつくような声の甘い物言いに似ず、芯にこもった強さが感じられる。毛糸で編んだうす茶の靴下。

みちは舞台を横ざまに仰むけに寝ている。わずかに毛並の末を波打たせた断髪。うすい桜いろのスカートに袖の長い白のブラウス。空いろのスプリングコートや白いハンドバッグが、枕許に無造作におかれて、胸と腰から下の線が美しいからだ。アルトの声音に三十歳の年齢がある。ナイロンの靴下は足許に丸められてきわだって白い素足。

右側の壁に男の紺の背広。茶の着物、黒の帽子。そしてその下に黒いリボンのついた兵隊服の写真がかけられている。

時計が三時を打って、みちは両手をあげて大きなあくびをする。そのまま手を頭の下において歌の終りをゆっくりくり返す。早春の昼下がりである。

みち (歌いながら) 眺めを何にたとうべき……。

きよ あ……お起きになった？

みち 眠ってなんかいない……ちつとも。

(みちは膝をたて、きよはゆっくりとミシンをまわし始めるが実際の音は聞えない)

きよ ごめんなさい。お煩さかったんでしょ？

みち 煩いの馴れてるわ。このごろどこでも眠ることにしてんの……電車中……歯医者者の待合室。おどり

ながらね……お客の肩に首をのっけて。結構喜んでチケットはずむ、ばかもいるし。

きよ 遅しいのね。

みち 何しにいらしたの？ いまのお姉さん。大変な声ね……そろそろ更年期でしょ？

きよ いい姉なのよ。いつもは。

みち 家賃はただだし……補助までくれてね……ああやって怒鳴りこまれても、ちったあ我慢せずばなるま  
いってところ？

きよ すみません。

みち 私にあやまったって……あなたの事よ……何だって言うの？ きんきんかんかん。

きよ ごめんなさい。

みち いちいちそう哀れな挨拶するんじゃないの。(寝返りうって) あらま……これ私のよだれ？ いやん

なっっちゃう……やっぱり口開けてねてたんだわ……おきよさん見なかった？ 顔。鼻が悪いのかしら少し

……ごみを吸う商売なんでねダンサーなんて。

きよ みち子さん……つらくない？ 生きてるってこと。つらいわ私<sup>あたくし</sup>。

みち 始まった……およしなさいよ。

きよ 私、死にたい……ごめんなさい。

(顔をかくして。みちが起って障子をあけると柔かい光りをふくんだ青一いろの空、この丘の

なぞえの家は、水をへだてて女学校の運動場と相對している。)

みち いいなあ水は。いつ見てもゆれてて。(大きさに手をかざして)さわいでるさわいでる女学生が……

ボールがおちたのバレーの。竿なんかじゃとどかない……誰か一人泳いじまわらないかな？ クロールでさあ、と。

きよ (みちと並んで) 一日一ぺんは涙がでるの。あの人たち見て。昔はよかった。

みち あなたは少し泣きすぎるね。涙なんて出るの贅沢よ。私なんて出るのは溜息ばかり。

きよ ごめんなさい。あなたも一人でお大変なのに。如何？ 坊ちゃん……その後。

みち いついつもおんなじ。薬はきかない。手術はできない。肋膜のあとで気胸もできない。こっちのからだ、いっそ鋸でひいてくれ……だわ。昨日なんか僕死んでもいいからお母ちゃんのそばにいたいなんて

……泣き出してさ……九つの子が。いじらしいより腹が立って……怒鳴りつけりゃあ、熱が上がるし、お医者はいるし目の前に。我慢してつねってたんだわ……ほら……この腕のあざ。キッスマークじゃございませんの。

きよ 本当にいくじないのよ私は。子供にも悪いと思ってるの。一日ミシンにかじりついてるでしょ？

一緒に遊んでやれず勉強も見てやれず……さっきも教科書パラパラめくって……あらこの子いつこんなこと習ってたんだらうと思っただらいきなり……。

みち 涙がでた？

きよ 主人さえいりゃあ……この子にももつと手がとどく……。

みち どうとう出ました主人が。

きよ 主人子煩悩だったの……とても。最後の主人の手紙。子供の事ばかり。もし主人帰って来てくれたら私どんなに……。

みち (かぶせて) およしなさいよ主人々々は。おたがい未亡人はね……主人はないってところから始めなくちやなんないの。

きよ そりゃよくわかってんの……どこ見まわしても主人の姿はない。でもそう思うと忽ち涙が溢れて来て……。

みち なっちやねえや全く。

きよ ごめんなさい。

みち それもよけいね。いちいちそうあやまんなさんなってんだ。三時か。日が長くなった。あんなにあか  
るい空。

きよ 何時？ ホールへお入りになるの。

みち きまった時間はあるけど守ったことない。時計がないの。電車中で盗られちゃったの。酔っぱらって  
たんでね昼間から。主人の形見。

きよ 惜しいこと。

みち さっぱりしっちゃった。いつでも主人に脈をとられてたみたい。

きよ 惜しいわ。

みち 貞女失格。爾今以後、何でも好きなことしろって亡きひとのお達しなのよ。いいでしょう？ こうい

う論理。

きよ 私泣いてるわ一日……もしそんなことになったら。

みち 身を投げますよ。前の池に。ごらんなさいこの部屋。御主人の帽子。御主人の洋服。大変でしょ？

毎日、はたきかけるだけでも。

きよ いつ帰ってくるかわかんないんですもの。

みち そう思わなくちゃ生きてられないんですもの。

きよ だってそうよ。お嫁に来てからこっち……私、自分だけのいのちって考えたことないのよ。

みち よく存じております。でもはつきり申上げますが、あなたの御主人はたしかに南方で水づくかばねになったのよ。

きよ でも私、その姿見ないわ。この目で。

みち あたり前よ。そんならどうすんの？ 私のなんか行方不明。いずれ満蒙の野末で白骨んなってる。も

う砕けて砂んなったかな？

きよ あなた堪えられる？ そう思うことに。

みち それが現実ならしょうがないでしょ？ 白骨を抱いたって冷いばかり。まして砂ともなれば、すぐ

っても指の間からざらりざらりだ。

きよ 私いつも思ってたの……南の島の青い海。そこで主人は抜き手を切って泳いでる……。たくましい

腕。ひきしまった胸。

みち メルヘンさ。あなたの。

きよ 現実よ。私の。いられないのよ。いつもいつもそう思わなくちゃ。

みち 未亡人根性っていうのよ。あなた口惜しくないの。亡霊にいつまでもとっつかれているなんて。

きよ 亡霊でもいいの。私主人にあいたい。ごめんなさい。(また顔をかくして。みちはその手の下の洋服をひっぱる)

みち いやよいやよ涙なんかこぼして。しみ抜きってとっても高いのよ。

きよ でもね……こんな母子二人のわびしい暮し中でね……せめて主人おもうだけが私の……。

みち わかつてるわ。あなたが卒業後のクラス会に一番先に結婚してやって来て、主人々々って三十六ぺん言ったの、有名な伝説んって。

きよ その半分くらいよ。

みち とにかく数をもって数えられるだけ、あなたはひと前に主人を見せびらかしたの。まだ結婚しない連中は舌を出してる。いい気味。いい気味。(煙草を吸いはじめる)

きよ だからばちだとおっしゃんの？ ばちでもいいの。この恋しさが、あのひとと二年一緒に暮したばち、というなら喜んで私……受けます。

みち そんなら泣きごと言いなさんな。一言言っては涙をこぼし……二言言ってはハナをすすり……はい、ちり紙。(ハンドバッグを投げて)

きよ でもね……私はやっぱりあけても暮れても……。

みち (さえぎって) 処置なしだね。煩いわよ少し。いくら泣いてもわめいても帰って来やしません。あなたの主人は。ごらんなさい。誰が黒いリボン結んだの？この写真。なかなかいい顔だ。あなたがぞっこん首ったけというのも無理がない。気が小さそうで十分ずるくて……甘ったるくて少々辛くて。ホールへくる奴にやあこんなのないな。みんないろいろのプレソダ。ねえ、ちったあこっちのことも考えてよ。朝

から晩まで写真眺めて泣いちゃあいられないんだ。ヌルヌル野郎のほったにだって、商売となりやあ玉のかんばせ押つつけるんだ。むしゃむしゃするわよ、あなたの主人は主人は聞いてんと。昔の友だち甲斐におとなしく聞いてあげんよ。(壁にかかった男の服装を見ながら) 何よ古着やみたいに。空巢にやられてよ。知らないわよそんな時泣きわめいても。今に売りやよかった。惜しいことした。ね……これだけでいくらだろう……洋服が二千元……帽子が……。 (手にとって) あぶらがしみてんのね……チツクの匂い？ あなたときどきつけてんの？ 感じ出して。

きよ 言ってるのよ……子供に。今にお父さんが帰って来てみんなこれを身につける。いつでもそう言ってるの。するとだんだんこの着物や帽子がいのちあるもののように思えて来て……。

みち 子供にかくれて抱きしめたりもするんでしょ？ (からからとわらう)

きよ わらいごとじゃないわ。せつないわ。

みち せつなかつたら生身の男をお抱きなさいな。子供にもあんまりいい影響与えないわね。うそを教えるようなもんだ。みすみす帰らぬひとを待たせ。がっかりしてやけんなって不良になったらどうすんの？ うそっぱちで固まってんでしょ？ 世の中は。せめて自分くらい本当のもの掴んでたいと思わないの？

たとえばそれがどんなに辛くたって。

きよ あなたはどうなされたの？ そんなら御主人の着物。

みち 売ったわね……お米のない時。自分や子供に直したのもある。きれが買えなかったから。好きな男にやったのもある。皆それぞれのそのときどきの私のしんじつなんでね、何一つ甘っちょろいことじゃございませんの。

きよ 羨ましい、そんなにわりきれて。



みち 羨ましかつたらやってごらんさい。とてもできないわでしょ？ 努力さえもしないでしょ？ 時間のない世界。永遠の未亡人。映画の題名だわせいぜい。

きよ 私未亡人だなんて思いません……そんな主人が帰って来ないなんて……思えないわ。だって女ってそうじゃない？ ……夫のある人はな、おさら。

みち いいなさんな……夫のある連中のことなんて。

きよ 私羨ましいのよ……生きた夫もってるひと。二人揃ったひとを見るでしょ？ 自分がずっと消えたくなっちゃう……肩身が狭くて。

みち 私思うわね。得意そうな二人づれ見ると。いつかこの男とってやろう。

きよ だから妾殺しが流行るのよ。

みち 本妻殺しよ。流行らせんなら。

きよ あなたお変りになったわ。やさしいやさしいお嬢さん。博物の時間に蛙の解剖、先生がなさったら、あなた声をあげてお泣きになったわ。

みち このごろは男でも殺したいと思うな。目ざわりなのがうろろすりゃあ。

きよ ずい分いらっしやるんでしょ？ 男の友だち。

みち 男の友だちなんて生ぬるいの大嫌い。

きよ それじゃあ……あの……こんなことお怒りになるかもしれないけど……ずっと……御主人のあと……こっち……。

みち 男なしで暮して来たかって言いたいんでしょ？ そういうのを愚問って言うのよ。

きよ じゃやっぱり？ あなた平気？ 失礼だけど。

みち 何が？ 夫でない男抱くのが？ ものは試しでやってごらんさいとより御返事の申上げようがないわね。

きよ 私どういうんでしよう……どんな男のひとにあっても、たとえば電車中や道でいろいろ見ても、一つもそれが男って意識で迫って来ないの。

みち 当り前よ。いちいち迫って来られちゃからだだがもたないわよ。

きよ つまりね……私には主人よりほか男に見えないってこと……つまり私はもう女じゃない。

みち うそおっしゃい。つねるから口のはたを。

きよ だってそうだわ。夜寝て朝起きて……私一日主人のことばかりあなたあなたと頭において……。

みち いやあねえ……なんていろいろっぽい声を出すのよ。だからいやんなっちゃう……未亡人は。男の話してるのとひとりでいろいろ気が溢れちゃう。ごめん遊ばせ。

きよ みち子さんあなた……本当？ 本当に私にはいろいろ気つてもものがあります？ そう見えます？

みち 怖いわ……にらんで。(首をすくめて笑う)

きよ 怒らないからおっしゃって。

みち 見えます。あります。

きよ どこにあります？

みち その目よ……うらみをふくんで。

きよ 私死にます……そんな不潔な自分見るなら。私いやよ……いろ気なんかあっちゃ困るのよ。

みち 困ったってあるわよ。不潔って何よ。D・D・Tまいたって消えやしないわ。それこそ不潔だ、清潔ぶるのが。よっぽどきれいだ、男が欲しいってわめくほうが。

きよ 私欲しくない。ちっとも一向に欲しくない。絶対に確実に欲しくないわ。

みち 確実に絶対に欲しいって言ってごらんさい。言うだけでも夜の寝つきが早くなるから。

きよ あなた私を侮辱なさりたいの？

みち とんでもないわ。尊敬してる……抱きつきたいほど。女に抱きつかれたってうれしくないだろうと御遠慮申上げてるだけ。

きよ 私電車中でもなるべく男の人に近よらないようにしてるわ。

みち しめなわを張るんだないっそ。未亡人用の。靖国神社でのりとあげてね。神主のアルバイトにしたらいい。売れるよ日本人大好きだそんなの。

きよ なんておっしゃられてもいいの……私あの人待ってるの……私があの人を知ったというのはこういうことなの……私が生れて来たということもまた。だって何のために生れて来たの？ 私たち。何のために生きてんの？ こうして。

みち もうよしてよ。げっぷが出そうだ。このひと何よ……たかが一人の亭主でしょ？ 羨ましくないわよ

……私だって結構亭主にゃかわいがられたわよ……わらってらあ写真が……見れば見るほどいかにもちよっとステキでござる。さぞや南の島で土人の娘たちにぎやあぎやあ言われたことだろう。青い海の白い渚でさんざん好きなことをして……あげくの果が名誉の戦死。男子の本懐これに過ぎるものなし。哀れをとどめんのは女房ばかり。亭主代りの男が欲しいため一言も言えず……子供に八つ当りしてべそべそ泣いて……あなた可哀相じゃないの？ 坊ちゃん……怒鳴りつけてたわね。お姉さんの帰ったあとで。あれだけの元気お姉さんにぶつけりゃいいでしょ、子供を怒鳴る女の声って大嫌い。女の声ん中で一ばん嫌い。さつきよっほどひっぱたいやろうと思った。あなた。

きよ (いままでの二倍のテンポの早口に) だってみち子さん……あんまりなのよ……姉が私に出ろってこの家。私にはいろいろ気があるって。姉に物言う時と義兄にいう時と声の調子がちがうって。義兄を誘惑するならすぐにもここを出てって欲しいって。

みち ほらごらんなさい……大ていそんなことだと思った。おどかしてあげんのよ……ではこれから正式に誘惑させていただきます。彼女哀願する。どうかそれだけはおやめ下さい。形勢逆転。

きよ いつ私がそんなことゆめにだって思ったでしょう……主人さえいりゃこんな恥辱も受けないんだと思  
って……口惜しいからいつそ一思いに……。

みち それはお勝手だけど私この間、喪服売ったばっかりでね……ちよっと当分お葬式がおっくうだな。

きよ 主人にあいたい……聞かせたい……私我慢がならないの……姉がよ……現在の姉があんな事いって  
くるなんて……主人聞いたらなんていうんでしょ。

みち (激しくきよに抱きついて) その主人いないのよ……絶対に確実に帰って来ないのよ。帰って来ない  
とはつきり知った所からあなたはしゃんと立てるのよ。しっかりしてよおきよさん……主人はいない……

帰って来ない……千年万年待ったって帰って来ない……いないんだよ。

きよ (それをふりほどいて) 私だめ……私そんな残こくなこといや……私死んでしまいたい。

みち (きよをはげしくこづいて壁ぎわに押しつける) まだそんなことを言うか。言うか。

きよ ……………。

みち ばかよ。あなた。

きよ ……………。(わらう。かすかに)

みち 殺しちゃうよ。しつこいと。

きよ どしてみち子さん……あなたそんなに私の事が気になるのよ。

みち 犬も歩けば棒に当る。

きよ 私の主人よ……ほっといてよ。

(みち、いきなりきよの頬をぶつ。きよ痛いわと頬をおさえて。二人顔を見合わせて笑う)

(きよすぐそのあと顔を被う。みちは障子をしめてねっころがる)

(女学生の合唱が聞える。コールユーブゲンの一節のくり返し)

(玄関のあく音がする。みちが立ち上がるのをきよが抑える)

声 森ですの……きよさんいらっしやいます？

きよ はい。(襖をあけて出てゆく)

声 御きげんよう。あのね。この間お願いしたお洋服もう手をおつけんなったかしら。

きよ いえまだ……すみません。急ぎのがありましたので。

声 よかった……あれ……ちよっと中止にしていたくださいんのですよ。せっかくですけど。

きよ そうざんすか？ あの……型紙だけはたったんですけど……。

声 ちよっと都合ができましたんでね……あの……生地いただいてまいりたいんですの。

きよ そうざんすか……じゃあ。

(きよ部屋にもどってみちの耳にささやく。「姉の御親友」。ミシンの下からきれ地をもって

ゆく)

声 それからねきよ子さん……この間のスーツね、ちよっと衿んところがきゆうくつで……腕んところに  
妙なしわがでて……ちよっと困るんですけど。

きよ まあ……どうしましょう……仮りぬいの時はたしか……？

声 私もそのつもりで着たんですけどね……がっかりしました。

きよ ちよつと……お見せいただきましょうか。

声 でももうしようがないでしょ……縫いなおすってこともできないし。

きよ すみません……どうしましょう。

声 主人が私の誕生日に特におくってくれた生地なんですのよ……年をとるほど主人……私の身のまわりにこまごま気をつかって……私に着物つくるのが一ばんたのしみなんですって……おほほほ……いやですわね。年甲斐もなく私に夢中。

きよ すみません……。

声 このごろはずい分皆さん洋裁してらっしゃるけど、特にあなたはお姉さんからの話してお願いしてるんですのね……残念ですわ。

きよ はあ……私もそれで一生懸命にしたんですけど。

声 本当に残念ですわ……がっかりしましたわ。

(みち起ち上がって玄関へでてゆく)

みち あ……失礼ですけど奥様。

声 はあ……。

みち 私こちらの友だちなんですけど……大変御迷惑おかけしましたそうで……あのお仕立代お返ししますとか……新しく生地をお求めしてお返しすることでお許し願えませんか……でしょうか。

声 はあ……そりゃそうしてただけでしたら大へん結構なんですけど……主人にも申しわけが立ちますけ

ど……着て着られない事はござあませんのよ。

みち いいえそれじゃあこっちの申しわけが立ちませんから……生地どこでお求めになりましたんげんしよ  
う。

声 いいえ……あなた……それほどまでに……。

みち じゃあお仕立代おもち下さいませんか？

きよ みち子さん。

みち いかほどでございましょう。

声 いいえ……下着の関係かも知れませんのよ……どうぞそんな御心配なく。

みち いかほどですか？ え？ きよ子さん。

声 千円でしたかしら。ねえきよ子さん。

きよ はあ。

みち では千円。(もどってハンドバッグから一枚ぬいてゆく)どうぞ。

きよ みち子さん。

声 私こんなのいただけませんわ。

みち でも旦那様に申しわけございませんから……どうぞ。どうぞ本当に。夜眠れませんから。

声 ではせっかくですから半分いただきましようか。私お釣りあるかしら……千円札ができましたら……百

円札もつのおおっくうで……ございました……やっとう五枚。あの……よろしいのかしら？ いただかない

とそちらさんのお気がすまないと存じていただくんですけど。

みち どうぞ……あなたさんのお気のすむように。

声 きよ子さん……じゃあ生地いただきましたわ。おそれ入ります……よけいな御心配おかけしましたわね  
……ごめん遊ばせ。  
みち ごめん遊ばせ。

(玄関しめてゆく音。二人の女、部屋に帰る。きよはみちのそばにすわる)

きよ すみません。

みち 何いってやがんだい……千円ぼっちで素人に縫わして……百円札のおつくうな御身分だってさ……  
何？あいつ。

きよ 奥さんよ……お金もちよ。

みち 惜しかったかな……興奮しちゃって……損したな……坊ちゃんに本でもお買いなさいとあげりやよか  
った。どう？ おきよさん……あのひとの顔甚だ狐的だったわね……恐らくあなたのお姉さんも同類よ。  
人相において。主人のない家へ来て主人主人ふり廻す奴あ、あんな顔つきになるんだ自然に。ちえっ。ま  
たあなたがペコペコして……どうしてああなんだろう……さっきお姉さんの来た時も。

きよ 私、おされちゃうのよ……主人のいる人っていうとただそれだけで……自分のほうが何もかも劣って  
るような気がして。

みち そのすきななのよ……あなたがつけこまれてんのは。あなたお姉さんの旦那様にモーションかけられて  
るんでしよう。あるいはこっちでかけたか。

きよ かけられたの……何かお感じになる？

みち いまの友だち夫人の出現でね……さっきのお姉さんの声と。態勢を調べた波状攻撃ってやつ。あなた  
をやっつけようっていう……。原因はいずれ……察するところ……。



きよ あなた私を絶対に信用して下さるわね。本当のこと申上げるから。

みち どうぞ……いずれあなたが殺されれば、こっちは証人にたつんだから。

きよ 昨夜雷が鳴ったでしょ？ 春雷っての。

みち ホール、ガラガラだったわ。大体このごろ不景気なの……アベックに押されて。

きよ 義兄が来たの。裏口から……母子二人で怖いだろうって。

みち 歌舞伎模様だね。光る稲妻。あれ怖いわいな……よくある手なんだ。

きよ 私帰ってもらったのよ、上へあげずに。

みち 無理しなさんな。そこまで誘き出しながら。

きよ ひどいわ……五十六よ。

みち 平均年齢ものびてるしね。

きよ ふだんはろくに口も聞かない。

みち 人がいいんだろうな……あんなお姉さん女房にして。

きよ 昨日の昼間もやって来たのよ。始めはそこの窓をあけてこっちを見てたの……それからやっぱり裏口

から上がって来たの。

みち ただで借りてりや文句言えない。

きよ 義兄は私が見てられないんですって。可哀相で。

みち 養女にするって？

きよ 妾になれっていうのよ。(顔を被う)

みち 泣くのはよけい。ゴーン。

きよ 妾になれっていったの。私頭の上から一ぺんに富士山がつぶれて来たようで。

みち (わらって) 大きなこといわないでよ。妾って何だか知ってんの？ 合理的な男の配給方法。この上もない贅沢だもんね……いまどき女一人に男一人……。桃源のゆめってやつさ……すでに。

きよ ……まさかと思うから上へあげたのよ……大体私ふだんめったに義兄と二人きりなんて……道であつてもやりすごすようにしているくらいよ……煙草一箱忽ち吸って捨て捨て、その窓の下から庭にほおる……

みち 風のない日でよかったわね。お姉さん勿論留守でしょ？

きよ 兄はおとなしい堅人で有名なのよ……姉は結婚して殆んど三十年間に、一ぺんも女の事で苦勞したことない……勿論けんかもしたことないっていつも自慢してたわ……その義兄が……私を好きだなんて……  
……いくら姉が留守だって……

みち 手を出したな……おっかなびっくり。

きよ 震わしてただけよ……気が小さいのよ……お酒も飲まないんだわ。心臓に故障があるって。

みち だめねえそんな男……妾もつ資格なし。遺産相続の時だけ御相談に応ずればよろしい。あなたはそれまでの暫定的処置としてこの家を出る。明け渡す。

きよ 私いきなり泣いたの……返事もしなかったの……そしたらまた昨夜スーツと戸があいて……

みち いとしき夫の亡霊と思いに……こはいかに。お出なさい。ここの家。

きよ でもね……

みち 未練ないでしょ？ 私のアパートにいらっしやい。

きよ ……

みち この家懐しくて出られない？ 御主人の帰ってくるまでは。

きよ あなたはおわらいになるけど……。

みち やれやれ。

きよ だってあの人……本当に帰ってくるって言ったんですもの。あの人帰ってくるって言ったわ……どんな不具になっても手や足がなくなっても、目一つ口一つ……生きているいのちのかけらだけさえありやきつと帰ってくる……私と子供んところへ帰ってくる……ひろい宇宙に君と僕と子供だけ……社会も歴史も人類も……戦争さえどうでもいい……僕は帰ってくる……生きて再び帰らぬ覚悟なんて大うそだ。せめて一生に一ぺん……本当の事をいいたい。僕があいしたのはただ一人の君……。

みち うまい。芝居のせりふみたい。

きよ ほんの見合結婚よ。戦争のさなかの。なのに私……あの人見た時、いきなりあの人なかに自分が吸いこまれてくみたいな気がして……私任せだったわその瞬間。私……仕合わせだったわ……いつもいつも我を忘れてあの一といた二年間。私いいの……あとの残りの生涯がどんなに長くて暗くたって……心ん中に灯がついてる……あの人が好き、あの人が好きだという……私待ってる……白髪のおばあさんになっても……枯れ木のように朽ちて倒れる日が来るまでも……待ってる。(むせんで)その外にどんなにいいことがあるっていうの？ この世の中に。

みち 習ったわね……昔……ひとりものの先生が声をふるわしてよみあげたわ……かくばかり……恋いつつあらずばたかやまの……誰だっけ？ いわのひめ……いわねしまきて死なましものを。昔はこれで優等生……万葉の恋にあこがれ。

きよ その夫……たしかに帰らないわ……毎晩寝るでしょ？ 子供のそばに。あの一と声を……あの一と

の形を自分の耳に聞き、からだにおもい浮べ……わが手でわが身を抱いて寝る……子供はだんだん大きくなるわ、あのひとの声や形はうすれてゆくわ……日一日と私はもぬけのからになるの。あのひとが欲しい……あのひとの声や形。おなしの望みと知れば知るほど私は爪先から死にたい思いに食べられてゆく。死にたいわ……いつでも……あのひと帰って来ないなら……死はいつもあのひとと一緒に待ってる。みち子さん……いろ気って何なの？ 私のからだがあの一とにあこがれる時、あのひとでない他の男を吸いよせるってのは何なの？ 私そんないやらしい自分見るなら殺すわ……自分で胸を刺して。

みち ああ痛い痛い。薬飲んで池に浮びなさい前の池に。漂よう未亡人。

きよ お嫁に来た晩私いざとなると怖くて泣いたの。あのひと一緒にあの池のまわりをあるいてくれたの。何も言わずにあの一と石を投げてんの。月夜だったから……水におちるのがよく見えたわ……私も投げた主人よりも遠くに。そしたらいきなり私を抱きあげて……ここの家まで歩いて来たの。

みち ラララ……ラララ……。(結婚行進曲をハミングで言う)

きよ でもその晩やっぱ私を一人でねかしたわ。ゆっくりしずかにおねなさい。低い声で歌ってんの……モツアルトの子守唄。

みち 何だと思ってるの私を……ズルチンサツカリン合成剤じゃないのよ。

きよ その子守唄……今でも胸の底にある。蓋をひらけば歌うオルゴールのように……かなしい時……つらい時……その歌が胸に鳴って……私のからだ中がオルゴールになるの。

みち 聞いちゃいらねえや……あなた……お立ちなさい。おどりましょう……私は女だからさわっても貞女だよ。(女学校の運動場の遠くで聞えるピアノは舞踏曲。みちはきよのからだを抱いておどる) 覚えてる？ あれは何？ メヌエットか……。

きよ 私主人好きよ……大好きよ。

みち わかった。

きよ 主人がいないで生きてるなんて……恐しくてとてもそれが本当とは思えないわよ。

みち それであと追い心中か。それもよきかな。

きよ 主人もいったわ……私が大好きだ。

みち オーケー。

きよ 私のようにかわいいもの見たことがない。

みち それから？

きよ かわいい、かわいい、かわいいって抱きしめてくれたわ。

みち (きよを抱いて) こういうふうには？

きよ (涙を手でぬぐって) ごめんなさい。私やっぱり死ぬわ。この家で。

みち どうぞ……いつでも死んでくれたまえ……それほどならばひきとめない……あとは私が貸してもら  
う。

きよ すみません……あなたにはいつもぐちお聞かせて。学校時代にはあんまりお親しくなかったのに。

そしてもう卒業して何年もすればお互いに暮しに追われて誰も哀れなものは見向きもしてくれないのに……

……あなたはなんてありがたい方なのだろうと……。

みち おきよさん……あなたねえ……御主人に首ったけなのはいいけどねえ……あなたの御主人が他の女に

もそういう事を言ったなんて考えたことあって？ かわいい……かわいい……かわいい。

きよ 主人が？ いいえ。そんなことある？ (ぽつりぽつりと考えて)

みち それがあるのよ。

きよ 誰に？ 誰を？

みち 私があなたの御主人に。あなたと一緒にになる前に。気絶しちゃだめよ。何にも気づけぐすりはない。

きよ 本当？

みち 私あなたの御主人憎んでたわ。戦死した時、ざまあ見やがれと思ったわ……南の島の空の上をね……  
大きな禿鷹につかまれてわめいてゆくあのひとの姿……夢に見た事がある。

きよ 私……知らなかったわ。

みち あなたがあのひとの子守唄聞いて眠りにおちた月夜の晩……私はあかりを消してガラス戸に顔をあてて月を見てたの。同じ夜の同じ地上にあのひとが私でない女という。涙がべたべたガラスにくっついて、月が万華鏡のように光っていた。女が死ぬのはこんな時だと思ったわ……でも……唇かみしめて、我慢したの。絶対にあのひとの死ぬ姿見るまで死んではならぬ。

きよ あのひと何にも言わなかったわ。

みち 言うもんですか。秀才ってのは一切自分に都合の悪いことは言わないもんだわ。つぶれかけた家の娘と、社長秘書の役を首にくっつけた社長の姪とは同じ抱いても重さがちがう。あのひとこそそとあなた  
のほうへいったわ……私に何の挨拶もなく。私も当時は令嬢のはしくれでね……親にも言わず泣き寝入り  
さ。小さい胸を痛めて。

きよ どうしましょう。

みち 慌てなさんな……それが本当をいうことさ……あのひとが出征の間際に一言いいたかったとい  
う……私も聞かされたわね……ひろい宇宙に僕と君と二人きり。うまいんだ。せりふが。釣られてみん

な許さなかったのが気に入らなくてあなたと結婚したのかと……寝返り寝返り眠れない晩がずい分あった。ひかれものの小唄でね……哀れな女ごころよ、その頃はまだ持っていた。妹の家庭教師。苦学するひと可哀相と人形あげたらいきなりその晩庭先で抱かれたの……とんだ火の種もらって……あれよあれよと燃えさかり、いまだにブスブスいぶってる。大丈夫。あなたに追っかけて結婚したら私の主人も言ったわ。まるでおんなじことを。おきよさん……覚えてらっしゃい。男と女のとりかわす殺し文句なんて幾いりもないのよ……幾いりもないってことを知るためにそれから何人の男が必要だったかしら……売り出しやいいんだレコード会社で。モツアルトの子守唄よりや、よく売れることは確実。

きよ ごめんなさい。

みち 御冗談でしょ。あなたがあやまる筋合じゃないわよ。一さんばらりこ残り鬼。鬼は私の主人かもしれない。よその男に傷つけられた破損品の心臓もった女房もらって。私あやまったわ……。何度も何度も満蒙の空に向って。ごめんなさい……私の愛し方が足りなくてあなたを不幸にしているのでしょうか……ごめんなさい……あなたに愛されたくてあなたを愛したくて結婚したのに……どうしてもどうしても憎い男が一人心に根をはって……忘れることができませんでした……チエツ唇が震えて来やがった……その主人だってね、案外私を知る前に何人もの女のかげを心におとしたのかもしれないんだ……だから女房の心に他の男が巣くってたって……気づかないのよ……そうじゃない？何が本当かあなたわかる？ わかったのは愛情なんていくらでもかけがえのあることだけ。かけがえがあると知りなら……ないもの探して……目をぎよろつかせて……これがたった一つ本当なんだ、狂いがないんだってものを……欲しい欲しいと追っかけてる……あの男にぶつかり……この男を引ずり廻し……贅沢な話しさ。あなたを笑ったけど、こっちこそいろ気狂いみたい……これが女の業かと歯ぎしりしながら……一人で泣いてわめいてきりきり舞

い……どうも相すみません……何にもつみのないあなたに八つ当りしてんの。

きよ あなた私をにくんでらっしゃる？

みち どう致しまして。いじらしいと思えばこそ下手を承知で洋服も頼み……ねえおきよさん……一ぺんはあなたの中からだを、心ではだかにひきはいで、にくいにくいと嫉妬のやきごて、ベタベタあてたの。あなたやせてる。道を通るやせた女、みんなひきちぎって捨てたかったわ……浅ましい話よ……そのあなた……いざ妾になれと言われりや自分はなってもあなたにさせたくないと思う……わかる？ 大事な……あなたからのからだ……。

きよ 私の主人とのつながりで？

みち やきもちやくんじゃありません。相手は水の底で魚のすみかになってるわ……やきもちやきたいのはこつち。いやだ……この部屋に入るでしょ？ あなたにあおられてまるであのひとが生きてるみたい。女を捨てる度胸のあるやつあ、亡霊になってまで女をとりこにすんのかと……ねえ……にくらしいわよ……亡霊の胴体つかまえて。ポキポキ小枝みたいに折っちまいたい。

きよ (窓のところから) あ……子供いるわ。あそこに水のほとりに。

みち 石を投げてる。親父に似たんだな……私も夏の海でよくあの人と波に向って石を投げたわ……失礼。

きよ 子供はね……お父さんが欲しいんですって……誰でもいいから男。さっき私に文句つけてる姉の前ではつきりいうのよ……僕おじちゃんがお父さんだといいなって……引っこみがつかないわ……姉に聞えるようにいったのよ……さつき叱ったのは。

みち 迷惑だな……子供は。

きよ あの子あんな遠くまで石を投げる。



みち たのもしいでしょ。もう主人主人をやめて子供子供にするのね。そして出るのね、この家。  
きよ ……………。

みち あなたがここにいたいということは……主人主人もあるけど結局お姉さんに依存していかれるからよ……経済的に。卑屈になっていじけながらも、でたくないんだ。

きよ そうかしら。

みち いらっしやい……私の部屋に。他が見つかるまで。

きよ ええ、ありがとう。

みち それに私……これからちよいちよい部屋をあけるから……用心もいいし。

きよ そう？

みち あなたに縫ってもらってる洋服で、私どこへいくんだと思う？ お客と明日温泉に行くの。子供特別

室に入れて費用が二倍かかるの。それがせめて毎日面倒見てやれない親の愛情なの。私からだを売るのは

男は探しまわったけどからだを売るのはこれが初めてよ。汚らわしい？ 汚らわしかったらここで御主人

の亡霊に取っつかれてお姉さん夫婦に悩まされていらっしやいよ。子供に悪いばかり。私の真実は子供

だけだわ。どんなに男とへべれけに酔っていたって、いつも頭の中にじつと二つ、子供の目が光ってこっ

ちを見てる。死んだ主人なんてどうでもいいのよ……ましてあなたの御主人なんてどうでもいいのよ……

男という男、死のうと絶えようと……私は自分の子供を生かすためだったらどんなことでもするわ……悪

い？ 悪い？ ありやありや……これは涙か……だらしねえな……あなたをさんざん叱ったくせに……泣

くわ三分間ショートタイム。その間洋服早く仕上げちゃってよ。

(ごろりと頬杖ついてからだを横にする。きよ、じつとしている)

きよ 義兄と姉とけんかしてる……あの声。はじめて……あんなの。

みち 三十年に一回か。天災は忘れた頃にやってくる。(間) いいわよ……たまにゃあ、あらしもあるほう

が……あなただって……私……こればかりはいうまいと思ってただけどね……あんまりおのろけきか

されて……ついおしゃおしゃして……でも親切よ……あなたには。そのつもりよ。(やや長い間)

きよ さ……早くお仕事かたづけましょう。

みち いつくる？ いまならおいしいコーヒーが飲めるわ。

きよ そうね……(窓の所へいって外を見て) 子供いない……あ……いた……鳴いているわとんびが。……

春ね。もう。

みち 私のアパートこれでもまじめなつとめ人が多くてね。坊ちゃんにも悪くないわ……別に。その代りあ

なたも子供の前じやいろ氣の話しはやめてね。

きよ あなたよ……持ちだしたのは。

みち (わらって) 勝負ひきわけ。(間) 私もね……外でいらついで帰って来るから……あなたと坊ちゃん

に少しなぐさめてもらいたいわ……不幸な者同士はそうやって生きてくより外ないわ。

きよ (かぶせて) みち子さん……私やっぱり……だめ。ごめんなさい。せつかくですけど。

みち また怒らせようと思って……。(と半身を起してきよを見つめる)

きよ ごめんなさい。

みち あなた私をにくんでんのか。

きよ どうして？ ちっともそんなこと……あのひとに代っておわびしたいほど……(間) 私あのひと好き

なの……大好きなの。(間) なのにあのひと苦しんでたわね……知ってたわね……皮膚と目ではっきり

と。はじめての月夜の晩にわかった……水見てて暗いあのひとの目。(間) 水見るとあの人の目おもい出す。ちっとも静かだったことのない。ゆれてる。何か不安に。(間) 私不安だったの……私はこんなにあいしているのに……何かある、あの人を夢中にさせないもの。私が悪いのかしら女として足りないものがあるのかしら……あの世に追ってって聞いてみたいと思っただわね……帰るまで待ってて見たい。わかったわ……あなただったの。さっぱりしたわ……私水見てあのひとおもっていたい……なぐさめたい……恨みたい……どして一言私にいつてくれなかったのかって。だってねみち子さん……私あなたとあのひとと目の前で抱きあっても我慢するわ……あの人のしたこと何でもさせたわ……ごめんなさい……私があのひとをあいするというのはそういうことなの、ここにいさせてもう少し……どんな苦勞があっても……あなたにくらべれば物の数じゃないわ……みんなが苦しんでるんだから……私も苦しむわ……いいえ……あのひとが苦しんでたんだから……私……あのひとが苦しんで眺めた水もつと見てたい。ばか？ おかしい？ ごめんなさい……べた惚れ……首ったけ。あなたには悪いことばかり……どうしましょう……さつき並べたおのろけね……本当半分……うそ半分よ……だって私……あのひとにこの世で、私一人だけあいされてたと思うだけが一ばん一ばんは合わせなのよ……でもこれからそれだけはやめるわね……あなたもあいされてたんだと思うわね……それがたしかにわかった本当のことなんだから辛くても我慢するわね……みんなそれぞれつらいんだから、あの人だってつらいことつらいまま死んでったんだから……我まんするわ……ごめんなさい……涙が出ちゃうどうしても。ねむってらっしゃんの？ 陽がかげって来たわ……水のほとりは風がすぐ寒くなって。

(きよは起ち上がって壁の茶いろの着物をみちの足の方にかけてやる。みちはわらい出す。きよがおどろく間に、足で足許にその着物をはぎ下して仰むいたまま)

みち 狸。狸。（狸寝入りの意）

（きよはミシンのところにもどって両の掌で顔を被う）

（みちは仰むいたままじっとしている）

（時計が四時を打つ）

（玄関があいて恐ろしくはつらつとした声で子供が帰ってきた）

声 お母さん只今。

（幕が下りる。女たちが、声に掌をひらき、上半身おこした時）

幕

底本.. 『田中澄江戯曲全集 第二巻』

白水社

1959年10月15日印刷

1959年10月20日初版

入力..平 佐喜子

2024年1月11日作成